

第 55 回関東女子学生バスケットボールリーグ戦での早稲田大学のゲーム分析
Game Analysis of the Big Bears in the 55th Kanto Girl Student Basketball League
1K03B212-8 吉田水穂

指導教員 主査 土屋純 先生 副査 倉石平 先生

～はじめに～

バスケットボールはアメリカの YMCA トレーニングスクール体育担当である、ネイスミス博士によって 1891 年に考案された。現在バスケットボールはオリンピック競技の中で人気トップ 3 に入るといわれ、世界中のインドアスポーツの中では 1 番人気があるとされている。そのような中、2006 年に早稲田大学バスケットボール女子部は創部 50 周年を迎えた。

～目的～

早稲田大学バスケットボール女子部は 1999 年に関東学生バスケットボールリーグ 1 部昇格を果たした。それ以来入れ替え戦を 1 度経験するものの、降格することなく 1 部チームとして定着している。1 部昇格後は 3 位・4 位と上位チームであったにもかかわらず、2003 年度からは上位進出を果たせないでいる。早稲田大学バスケットボール女子部が勝つことができない原因を探ること、また、勝敗を分けた原因を明らかにし、今後の、早ければ 2007 年早稲田大学創立 125 周年の年に結果が残せるよう、早稲田大学バスケットボール女子部の戦績向上に役立つ資料を得ることを本研究の目的とした。

～方法～

2005 年 9 月 3 日～10 月 16 日に行われた、第 55 関東女子学生バスケットボールリーグ戦での早稲田大学の 12 試合を対象ゲームとした。対象ゲームを全て VTR 録画し、スコアとシュートチャートを記録した。

ゲームの成果を調べるために、撮影した VTR を再生し、攻撃回数・得点・シュート率・ミス数・被パーソナル・ファウル数・攻撃成功率リバウンド数を調べた。

攻撃については 1. ファストブレイク、2. セカンドブレイク、3. リバウンドシュート、4. それ以外に分けて計測し、合計して 1 ゲーム毎の総攻撃回数と成功率、それぞれの攻撃頻度と成功率を算出した。

シュートについては地域別に分類し、各地域別に試投数、成功数、シュートの際にファウルとなった本数を計測した。1 ゲーム毎に、3 点シュート(3P)試投数・成功数、2 点シュート(2P)試投数・成功数、フリースロー試投数・成功数、シュート成功率、得点を算出した。

リバウンドについてはオフェンスリバウンド(OR)数、ディフェンスリバウンド(DR)数をそれぞれ計測し、チームの

トータルリバウンド(TR)数として集計した。

～結果と考察～

- ①早稲田大学の攻撃回数には、12 試合平均 95.3 ± 2.6 回、勝利試合平均 94.2 ± 10.0 回、敗戦試合 96.0 ± 2.8 回と敗戦試合のほうが攻撃数は多く、対戦相手との差にも、見られなかった。また、すべてのエリアにおいてシュート成功率が低かった。そのため、攻撃回数を増やすことより、シュート成功率を向上させ対戦相手との成功数の差を縮めると同時に対戦相手成功数を減らすようにしなければならないと考えられた。
- ②12 試合合計の平均および、敗戦ゲームでは 3P も 2P もどちらも成功率は対戦相手よりも低くなっており、勝利ゲームは 3P の差はほとんど見られず、2P が対戦相手に勝っている。このことにより、3P よりも 2P を優先するべきである。特にシュート成功率に有意な差が表れた、ペネトレートエリアのシュート成功率を上げなければいけない。
- ③攻撃局面として、成功するとチームに勢いと流れを持ってくるきっかけとなるファストブレイク(FB)を 1 試合 6 本以上成功させ、対戦相手の成功数を抑えるようにしなければならない。
- ④リバウンドはニュートラルな状態のボールの奪い合いであり、攻撃回数に直結する。早稲田大学は全体の平均値だけ見ると対戦相手との差がなく、対等に競り合うことができています。リバウンドの 1 試合の目標値を勝利チーム平均値である、OR12 本以上、DR26 本以上、TR38 本以上とすることで勝利に結びつく。

～結論～

これらのことにより、本大会における早稲田大学バスケットボール女子部のチーム課題として、2P シュートの成功率を上げるためのフォーメーションやチーム全員のシュート力を上げることが必要であり、早稲田大学の FB 成功数を増やし、対戦相手の FB 数を減らすため、攻守の切り替えを早くすることともに、対戦相手の強い点にアジャストするためのディフェンス力の向上、ゾーンディフェンスなど多様なディフェンスパターンを持つこと、などが示唆される。